

The Haunted Hotel : 主体構築と暴力

溝 口 薫

Summary

The Haunted Hotel: Identity Construction and Violence

MIZOGUCHI Kaoru

It has only been in the past twenty years that critics have come to regard Wilkie Collins's sensation novels as literary works serious enough to be examined closely. The reevaluation today can be traced back to the cultural studies beginning in 1960s in which literary works came to be treated without distinction in genre and to be discussed in a wider cultural historical context in order to clarify, for example, the cultural function of literary works as power reproduction apparatus or as vehicles to disclose various forcible power forms within a culture. The critics nowadays of Marxist criticism and/or feminism often discuss Collins' works as a challenge with the conventional assumptions of perception, consciousness and cognition as well as an exploration of instability of identity relating to gender institution. In this paper, I will show how his *Haunted Hotel* is one such work displaying post modernist issues.

The Haunted Hotel has long been regarded as a mere crime mystery of minor quality because it was written in 1878 when Collins was poor in health and the work looks highly overwrought and somehow obscure. However, a closer examination especially as to the motif of the social sexual identity construction of each character may reveal this seemingly loosely-organized crime mystery is more than that—rather, a story consistently dealing with a forcible process of subjectivity construction resorting to the gender ideology of the day. Every male or female character reestablishes the male or female self, making a transgressor of the Other to be denied, against which he or she safely places the self which conforms to the institution. Indeed, Collins neither spare the traditional Angel in the House type “good” heroine Agnes nor the criminal Countess Narona from treating them as items on the list of ideological violence.

I. はじめに

I.1. コリンズ再評価の流れ

ウィリアム・ウィルキー・コリンズ (William Wilkie Collins, 1824–89) は、最近20年間にわかに批評家たちの注目を集めているヴィクトリア朝後期の作家であるが、Dickensの肝煎りで小説を書き始めた1850年代から死まで約40年間にわたってセンセーション・ノヴェルズというサスペンス溢れる犯罪ミステリ風小説を書き続け、存命中は大いにもてはやされた人気作家であった。しかしながら、その後コリンズの諸作品は、いわゆる代表的長編小説 *Women in White* (1860) あるいは *The Moonstone* (1868) を除いて、あまり顧みられなくなる。その原因は、まずはディケンズの弟分としての位置付けにより、ともすれば大作家の影になりがちであったこと、また持病の痛みを和らげるために用いたアヘンによって次第に筆力が衰えてきたこと、さらにはディケンズの死後、彼の創作上の相談相手となったチャールズ・リード (Charles Reade, 1814–84) の影響で作品に社会性が先行し、作品の面白味が失せてきたこと等、様々な事情が考えられるのである。だがなかでも決定的な要因は、その後の時代がコリンズをもっぱら大衆作家と見なしたことであろう。特に彼に続いたこのジャンルの作家は女性が多かったため、社会はこれを扇情的で内容のない「低俗な」文学とし、もっと深刻な問題を扱った「高尚な」文学と一線を画したのであった。

さて今世紀におけるコリンズ再評価の動きは早くは30年代、そして50年代にさかのぼる。が、いずれも大きな潮流になるには至らなかった。この時期の批評は、コリンズ作品に窺われる社会意識や作品の細密な構成、人物造形の質の高さを評価し、表層的扇情的効果とは別にその文学性に迫ろうとするものであった。そもそもコリンズは作品の前書きなどにおいて彼の創作における「まじめな意図」を表明しているのであり、初期再評価はその意図に向き合おうとした点で評価できよう。だがコリンズを包括的に見る視点を提供するものではなかった。

さて今日のコリンズ・ブームの起点は、やはりジャンルを越えて文学を捉えてゆこうとする60年代の文化研究の勃興にある。それはやがてイデオロギー批判を基礎に芸術における権力の再生産機能を明らかにしていく文化研究、マルクス主義文学批評あるいは新歴史批評を産んだ。それらはいずれもコリンズの作品を文化や歴史といったより広いコンテキストにおいてテクストのミクロな権力分析を垂直的な視点から行うものであるが、こうした新たな視角は、ジェンダーやポストコロニアル批評といった観点からも検討を加える道を開き、かくして今日多様なコリンズ批評が生まれることとなった。新しい観点の強みは、それまでは単に小説の筋の意外性や読者に与える興奮度という情動的効果においてしか説明されてなかった作品の「表層的」な「面白味」を含めて、その構成、文脈、細部を取り扱うことを可能にした点にある。たとえば登場人物同士の緊張したドラマ展開を説明するのに、人物のせりふのうちに相反する観点や声、あるいはイデオロギーの二重性を認めることによって、深層からそのテンションを照らし出すことが可能となった。あるいはリアリズムの規範を破ってゴシック的要素を取り入れ

るコリンズの表現手法、また記録文書風の飾り気ない文体と、強烈で生彩に富む喚起力のある幻想の混合という特徴に注目してもよい。ヴィクトリア時代後期の作家たちは多かれ少なかれ、小説のリアリズム的前提に対する懐疑に直面していたが、コリンズについて言えばそれは、「意識とアイデンティティ、社会と自己の関係、無意識の働きや身体と精神の相互関連」におけるそれまでの認識の枠組みに対する懐疑なのである¹。今日の批評的視点はコリンズのテクストをそうした問題に取り組む作品として読むことを可能にしたのである。

1.2. *The Haunted Hotel* は失敗作か：作品への視点

さてコリンズ再評価はかように大変興味深いのであるが、残念なことがあるとすればそれは対象となる作品がコリンズの「筆力が衰えていない」とされる1870年代以前の長編小説に集中しがちなことであろう。1878年に書かれた *The Haunted Hotel: A Mystery of Modern Venice* (月刊雑誌 *Belgravia*、1878年6月から11月に掲載、翌年、Chatto & Windus から2巻本として出版)も、1923年に T. S. Eliot が中心人物であるナローナ伯爵夫人の人物造形を誉めているものの²、現在でもほとんど論及されることがない。中世の城を改装して近代的にしたベニスのホテルを中心的舞台とし犯罪にまつわる謎が繰り広げられるこの物語があまり論じられない理由は、無論幽霊が登場するこの物語が荒唐無稽だからというのではない。実際コリンズは純粋な超自然現象はほとんど取り上げることがなく³、取り上げてもむしろ登場人物の心理的な問題と関連させる作家なのだ。この作品が取り上げられにくい主な理由とは、結局犯罪の謎や中心的人物の設定があまりに凝り過ぎており、わかりにくい作品という印象を与えることによる。だが、このわかりにくさは、工夫の過剰というより、むしろ物語を単純化した視点のもとに読もうとする読者側の読みの態度、認識の枠組みに関わっているように思われる。それはこの物語を犯罪が解明される小説として読む態度である。

たとえばこの物語の最初の部分には、犯罪の解明に重要な役割を果たしそうな人物——医師と弁護士——が登場するのだが、彼らは、ほぼその場限りで物語から姿を消してしまう。もし彼等の登場の仕方が「あっけなく」思われたとしたら、それはまず物語を犯罪の謎を解明することを目的とする犯罪ミステリのフォーミュラに当てはめてよんでいるといえよう。実際、比較的短い犯罪物語の場合は特に、そうした登場の仕方は異例なのである。あるいは小説の最終的結末をとっても良い。この物語は最終的にほとんど謎が解明されない小説として放り出されてしまう小説なのである。この小説の謎の解明を期待していた読者は、カタルシスを奪われ、奇妙な不安のうちに取り残されることになる。

この物語は実はそうした読みを誘う部分もあるだけに、こうした反応は避けがたいのも事実なのだ。たとえば、作品の中心的事件にして最大の関心となるべき謎は、まず物語の最初の部分に提示されている。新婚のモントバリ卿がイタリアにともなった従者の失踪とそれに続く卿の病死である。すぐにそれらは犯罪がらみの謎であることが暗示され、続いて事件に対してさまざま調査や推理、憶測が重ねられ、いずれも決定力を欠くため謎は一層深まってゆく。つまり読者はいやがうえにも犯罪の謎解明へ、犯人の同定へと誘われつづけ、事件の全容が明ら

かになり、秩序が回復されるのを心待ちにせざるをえなくなるのである。ところで犯罪物語の場合読者の期待を裏切る結末が用意されている場合も多々ある。この物語も実はそうしたどんでん返しを用意されているのであり、物語がその前半部分において、解明の期待を誘う傾向を見せるのは、実は結末の意外な逆転のためとも理解できる。後半部、ホテルに投宿した被害者の家族やゆかりの者が見る不思議な夢と幻覚によって事件が急速に再浮上するや、追い詰められた犯人は「告白」に及び、物語はクライマックスに達する。と、急転直下、その告白は突如中断され、その真偽のほどが不明なまま、事件は社会から隠蔽されて終わるのである。

モントバリ―卿に婚約者を捨てさせ、結婚し、財産と彼に掛けた生命保険金を目的として卿を殺害した経緯を記した告白を「たわごと」として、火にくべてしまうのは、彼の弟で卿の称号と地位を継いだスティーヴン・ウェストウィックである。このことにより、犯罪解明が期待されるはずの小説から、犯罪が消滅してしまう訳で、確かに意外な展開として読者の注意は引き付けられる。実際、この被害者の家族による犯罪の隠蔽は、さらにしたの弟のヘンリーによっても強化されている。ヘンリーはナローナがその告白とともに示したホテルの隠し部屋の遺体をモントバリのものと同定する物的証拠を隠匿するからである。彼等が犯罪の隠蔽を行うのは、その妻ナローナ伯爵夫人に殺害されていたということが判明しては、貴族として家族の地位、権威そして名誉に傷がつくことをはばかったからに他ならない。とすれば、この物語はある意味で支配階級の社会正義の否定を暴露するもう一つの犯罪小説として読むこともできるものとなる。

だがそうした物語解釈はこの物語に正当であるとはいえない。⁴ その理由は、犯罪解明を裏切る犯罪隠蔽小説という解釈を取ったとしても、物語の不明な部分が多々残るからである。実際この結末における告白の中断は、被害者の家族による告白文の廃棄という強制的中断に先駆けて、犯人自身が告白の意志を失うという中断が起きている。つまり、告白は未完であり、さらに言えば、芝居の脚本を借りて書かれたその告白は、途中から犯人にとっては告白というより、創作としての意味しかなくなるのである。そのことの意味を問わずにはこの小説は語れないのである。また犯人自身による告白の中断は犯人が天罰の妄念に憑かれた存在であるということ を重視すれば矛盾となる。ナローナ伯爵夫人に告白の意図があったことは、それと同時に彼女自身が遺体の隠し場所を示していること、また未完ながらそれを裏付けるだけの内容をもった告白を書いていることでもわかるのである。たとえばナローナはその内面が分裂している存在と取ることもできる。だとすれば犯人が分裂しているという内面の問題と結末の逆転的展開とはどう繋がるのか説明されねばならない。また犯人の告白の中断はさらに深刻な問題を引き起こす。というのは、犯人の告白は通常、物語の中で積み重ねられてきた解釈の断片をつなぎ合わせ、事件の全容を現す役割があるのに、これが未完で終わり、なおかつ真偽のほども判定無効となるので、積み上げられてきた解釈の断片それぞれが真偽不明のまま放置される結果になるからである。この物語の結びの文は謎だらけの結末に戸惑う読者にさらに追い討ちをかけるようからかいさえするように見える。

これで物語はおしまい？

これでおしまい。

幽霊ホテルの謎は説明がつかないのですか？

自分自身の生と死の謎が説明できるのかどうか、胸に手を当てて考えてご覧なさい—ではご機嫌よう。⁵

だがこの結びの文は、むしろ物語を読む新たな読みをスプリング・ボードなのだ。というのはほかでもない。それはこの物語が通常の犯罪物語に見られるような犯罪の謎は必ず解明されるという前提を拒否する物語であることを宣言しているからだ。⁶ 言葉を替えて言えばこの小説は、本質主義を否定する。そればかりではない、被害者の家族が犯罪の隠匿をおこない、あまつさえ被害者の遺体を放置したまま去るこの結末は、犯人自身の告白と中断という事実と並列されていることを重視するなら、悪人の究明という通常の物語が前提とする善悪二項対立図式もまた否定するものと言える。物語は結末に至ってこの新しい前提のもとに新たに読み返さねばならない物語となる。

そうした見解のもとにこの小説を読み返してみると、小説を構成する各部分、すなわち（犯人を含めて）様々な登場人物が重ねてゆく事件の解釈自体もまた、新たな意味を帯びて見えてくる。提出されるどの解釈も事件の解釈の断片というよりは、むしろ己の過去と現在を統一的に扱う自己の物語ないし、社会的性的アイデンティ再構築の内容となっているのだ。実際、どの登場人物も、事件ないし、その中心的な人物に多かれ少なかれ関わって、いわば「自己」をどのように再定義するのが要求される一種の自己危機に陥っている。そして彼らの語る解釈は大抵の場合、むしろ逸脱者とされる人物についてのイメージに反応するものなのである。ナローナ伯爵夫人はこの物語においては稀代の「毒婦」という社会的な烙印を押された存在であるが、そのことを認める者も認めない者も、結局はこの女性や彼女に関わる「他者」を逸脱者として位置付け、これに対して「健全な」男性ないし女性としての自分自身のありようを成立させているのである。物語の終局部において、ナローナの告白文を暖炉にくべる暴力的行為は、集団の保身のためであるが、実はこの種の暴力は実は彼らの内面において恒常的に繰り返されているともいえる。その意味で、この小説は犯罪ミステリの形を借りた、ジェンダー・イデオロギーによる暴力的主体構築の物語なのだ。

ところでコリンズはこの小説において日付を1860年と明示している。この時期はイギリス経済が国際的にも国内的にもその力においてピークを越した時期である。軽工業から重工業へと経済の重点が変化する中、第三次産業——すなわちエンターテインメントとサービス業がグローバル化してゆく時代なのである。そのことを反映するかのようにこの小説中心的舞台となるベニスのホテルは、小説が始まる時点では個人所有の城だったものが、事件をはさんで、改装され、ガス灯など近代設備を整えて株式会社の経営になる近代ホテルとして生まれ変わる。また小説に出てくるほとんどの男性は行動的な機敏で優秀なビジネスマンとして新しい経済活動に携わっている。たとえば二代目モンタバリーは称号を受け継ぐ以前は、アメリカに所有している鉱山で成功しており、次の弟のフランシスは新しい企画、人材を求めて大陸を闊歩する有能劇場プロデューサーである。またこの小説のなかでもっとも事件に深く関わることになる

その下の弟ヘンリーは投資家であり、主要投資先は舞台となるベニスのホテルなのである。こうした詳細な時代背景設定においてもこの作品は興味深いのであるが、それは単なる書割として登場しているのではない。コリンズは、人々の内面のありようと、ますます活発化する資本主義的自由競争経済体制社会の關係を見通している。

この時期の男性主体は金銭を産む能力と達成が重要なファクターなのである。金銭を産む理性能力は男性に「万能感」、すなわち男性としての自分に完全に満足の行く根拠を与えるのである。したがって反対にそれが奪われることを極端に恐れることになる。その恐怖はしばしばある種の女性表象によって代弁される。このヴィクトリア朝後期の文化の中には、この男性の万能感をサポートしてきた家庭的で精神的に無垢な伝統的女性像に対して、それとは対照的に万能感を揺さぶり競争から脱落させる誘惑と退嬰の象徴である悪魔的女性像が誕生してくる。いわゆる世紀末のファム・ファタルの初期形態ともいべき女性イメージないし女性幻想である。⁷ この小説のナローナ伯爵夫人は、多くの男性登場人物によってまさにそうした表象となる。一方女性主体にとってもその表象は女性「悪の権化」として、彼女達の主体成立に貢献する。

以上この物語を最近の知見に従ってその構成上の特徴から、この小説を読み解くにふさわしい視角を定めた。では、主体成立に働くジェンダー・イデオロギーに注意を払いながら登場人物の主体構築分析を行ってみよう。そこに現われてくることとは、主体とはわれわれが思うほど自明でも自律的でもなく、社会において深いレベルで共有されている価値観の力によって無自覚のままに方向付けられているという事実である。物語に一覧される様々な主体はその見えざる亡霊のようなイデオロギーの力に支配されている。⁸

Ⅱ．男性主体と逸脱的「他者」

Ⅱ-1 ワイブラウ医師とナローナ伯爵夫人

まず冒頭に登場するワイブラウ医師に注目してみよう。医師は一見物語の狂言回しに過ぎないように見える人物である。なぜなら彼は読者の関心を強く引き寄せ、次にこの物語の中心的人物であるナローナ伯爵夫人についてその背景や人物関係に関する情報を読者に提供すると、あとは一切物語に登場しなくなるからである。しかしながらに述べた視点からこの部分を読み返すなら、ワイブラウ医師は単なる物語機能どころか、この小説の中心問題を冒頭において提示する物語の重要な一部であることがわかるのである。

「1860年ロンドンでその名声が最高潮に達していた」と紹介されるワイブラウ医師のもとにナローナ伯爵夫人が訪れるのは、みずからの妄想が狂気の兆候であるか診断を受けるためである。約束なしのその突然の訪問に当惑した多忙なワイブラウ医師は無視して往診に出かけようとする。が、先回りした伯爵夫人につかまり、時間外診察を引き受けてしまう。ワイブラウがこの女性を診察する気になった動機は、彼の職業的義務感や道義心とは無縁のものだ。彼は、女性の診察を乞う決意に溢れた「言葉や行動」によってではなく「その表情に潜んでいた物言わぬ魔力ゆえ」思わず引き受けてしまうのである。すなわち「死人のように青ざめている」顔

色と「金属的な輝きを持つ生気と光彩を帯びた」「黒くて大きな瞳」、その「その顔色と瞳の息を呑むような対比」に「呪縛され」たからなのである。ワイブラウ医師は、ナローナの「黒い瀟洒な衣装」、「異国の血を引く」らしく「整った顔のつくり」、「優しさを欠いた目の表情」に釘付けになったように見入っている。明らかに彼は、この女性の外見的魅力に見せられていることがわかるのだが、彼は自分が「覚えた感情」について次のように正当化してしまう。

「最初感じた驚きは別にすれば、〔この感情は〕抗いがたい職業上の好奇心というべきものであろう。彼女の症例は、彼が医師として経験したことのないまったく新しいものかもしれない。きっとそうだ。往診の前に彼女を診察してもきっと損はない。」⁹

この医師の内的独白は、性的関心を職業的野心にすりかえるものだ。医師がこの患者にたいして圧倒的な性的魅力を感じていることは、同じ場面で、さんさんと日が差しかかる中「眩しがることもなく日の光を見据えている彼女の驚のような眼差し」そして「皺ひとつない白く滑らかな肌が、日の光を受けてこれまで以上に白く見える」のを前に、「長い医師生活の中ではじめて患者を前にして脈が高鳴るのを感じ」さえるという箇所にも明らかであろう。だが彼がそのことを認められないのは、彼女が危険で、脅威的で不安を巻き起こす女性に見えるからである。実際、ワイブラウは問診を納得して始めたにもかかわらず、内心ではナローナのケースが期待はずれではないのかと煩悶しているが、それは、なにより彼の自己弁護が無効であったばかりではなく、彼の一枚岩的な既存のアイデンティティがこの女性を前に極めて不安定に揺らいでいることを示すのである。

この診察の間彼がその職業的スキルと知識を尽くして理性的に彼女を診たことは否定できない。ナローナは、あたかも彼のような人物なら、どのようにすれば手を抜かないか知っているかのように、「新病の発見者として有名な」彼だからこそ敢えて診察を受けにきたことを告げ、彼のプライドを満足させるのである。なにしろ「彼が成功し名声を勝ち得たのは、ごく稀にしか診られない病気を発見する能力」によるのであり「その能力において同業者で彼に匹敵するものはいなかった」のだから。いささか自己満足げな調子を帯びてユーモラスに描かれているこの語りの部分には、彼の男性主体の基盤がよく示されていよう。それは単に職業的専門的能力というよりは、むしろ同業者を抜いて成功する社会的成功能力、自由競争社会で成功する経済的活動能力と換言できるものだ。この能力を支えてきたものというまでもなく、彼のまじめさ、持続的努力、わき目も振らず結婚もせず仕事にまい進してきたひたむきな勤労精神である。だがその故に、彼の理性的意識構造は、扁平で柔軟性に乏しく単調で、反転的な欲望に囚われやすいのだ。ナローナによって揺さぶられたセクシュアリティとその混乱はそのことを如実に示していよう。ナローナが示す「死」のような美、それはいわば「理性の停止」であり、活動不能状態を呼び起こす魅惑である。あるいは生命力に溢れている猛禽のようなその目は、酷薄にも「知性を捕食する性的魅力」である。それらは持続的建設的経済的理性にとっては永遠の休息と破滅を同時に意味するアンビバレントな嫌悪すべき魅惑なのである。¹⁰

さて診察の結果、結局狂気の兆候が見出せず、職業的プライドが傷ついたワイブラウは、ナローナの訴えにさらに耳を傾けてしまう羽目になる。夫人の訴えとはモンパリの結婚の影

に婚約者アグネスが存在したことを知り、またその疑うことを知らない清純な人柄に触れた途端、自分自身の「悪」が思い知らされ、アグネスこそ己を破滅に導く存在と直感した次第を話し、その想念が去らないというものである。医師として彼は、そうした問題は教会へ行くべきであると述べながら、内心では違った反応を示す。訴えを聞きながら、夫人が「総ての人の内なる悪に気づき、それに対抗できる内なる善の力を得ようと懸命に努力している人間」である可能性を感じないわけではないのに、断固この女性を断罪したくなるのである。「あたかもつむじ曲がりな本能が『この女を信じないよう心せよ!』と語りかけたかのように」¹¹ 医師が唐突に彼女のよこしまさを強く感じるのは、プライドの傷、そしてセクシュアリティによる主体混乱からなんとしても理性的な主体を再構築せねばならなかったからである。彼は夫人が残していった「礼金」あるいは「彼女が触れたものならなんでも——もらうなどということは、考えただけでも不愉快になる」のは、強く自己を守ろうしているからである。興味深いのは、にもかかわらず、夫人が去ると、彼女の名前、滞在先を知るために従者に夫人の跡をつけさせたり、詳しい消息を知りたくてクラブに出かけ、果ては結婚相手の男はどんな人物か見たくて、夫人の結婚式にまでこっそりと出かけたことであろう。こうした彼の所業は後に「彼が死ぬまで、誰かが彼に思い出させようとしようものなら怒り出す事柄」となる。それは、彼がナローナのような女性とのつながりを恥じるからこそである。そのつながりの一切を記憶も含めて拒絶することで、彼の理性的な主体はかろうじて保たれるのである。

II.2. モントバリ卿とヘンリー・ウェストウィック

ナローナの毒婦的な「嫌悪の魅惑」とその脅威を否定する理性的なあり方を、時代のいわゆる「ノーマル」な男性のあり方と考えるなら、このことは物語の中心的事件であるモントバリ事件の意味、ならびにモントバリに対するその家族の冷酷なまでの無関心の理由もさらに明らかになるように思われる。モントバリは要するに時代の男性主体の敗北者なのだ。モントバリがナローナに結婚を申し込んだのは、時代の常識に囚われない大胆な男性であったからでなく、また深く考慮した末のことでもないのは、アグネスと婚約解消のプロセスの慌しさ並びにナローナとの結婚後後悔するその速さからも察せられるのである。結局彼はナローナの外見的魅力に無思慮にも惑わされた弱い男性であったのだ。だが、それだからこそ、彼は彼の弟達の嫌悪と軽蔑の的となるのである。彼はウェストウィック家の權威に傷をつけたばかりではなく、非理性的なものに負けてしまった男性として、彼らには男性主体の敗北の禍福しいしとなるのである。彼らは一旦病死として認められていたモントバリ事件を再考することを拒否する。発見された遺体は兄モントバリのものである。それを放置して去る兄弟はある意味で二度目の殺人を行うことにも等しい。この極端に冷酷な行為の基底に、敗北的男性主体を無視する暴力を見ることは困難ではない。ワイブラウ医師が教会で見たモントバリは「どこにでもいそうな中年の軍人」「顔つきにも体つきにも特筆すべきことはなにもない」平凡な印象の男であることが示されている。それはそれだけ、この小説で扱われている男性の弱さが特殊なものではなく一般的なことを暗示するものであろう。ならば、この兄弟の振る舞いは、より強い

理性の持ち主としての男性主体成立に関わる問題として捉えられるのである。

ウェストウィック家の兄弟の場合、ナローナに対して性的に無関心であるのは、二つの理由による。一つは、兄を反面教師とせざるを得ず、ナローナに深い軽蔑をこめて遇うことが彼らの主体意識には必要であること、そしてもう一点は彼らのセクシュアリティが伝統的な女性性へ向かうものであるということだ。ヘンリーといえはこの小説の中ではMontbaryに捨てられた家庭の天使ともいべき婚約者アグネスの愛をめぐって、兄に負け、兄の死後、再びその愛を勝ち得るべく、彼女に相応しい男性になろうと努力する青年である。一昔前の小説なら彼のこの役回りは彼を正真正銘のヒーローにしたであろう。しかしこの小説の中で彼は「習慣や慣例から外れた行為は何でも嫌う男」と説明され、むしろこの小説が問題視しているジェンダー・イデオロギーによる主体構築の典型例として登場してくることになる。彼が死んだ兄のMontbaryを忘れない誠実なアグネスの愛を勝ち得るためには、単に結婚可能条件としての経済的自立を確立するだけはいけない。アグネスに一人前の男性として認めてもらうためにも、彼女を危険から守り、彼女の安寧のために積極、果敢に行動する強い保護的男性とならなければならないのである。実際ベニスのホテルに投宿したウェストウィック家ゆかりの人々のうちでアグネスに近づいてくるナローナを何か悪質なことを企む存在として警戒するのはもっぱらヘンリーであるのは意味深い。自分をアグネスを救う騎士に見立てるかのよう、アグネスの代理としてナローナと対決に及ぶ一連の行動を通して、彼は彼の保護者的役割を果たす男性的アイデンティティを証明し、最終的に彼は彼女に受け入れられるのである。追い詰められ苦悩するナローナと直接会見を重ねるのはヘンリーのみなのであるが、彼は「毒婦」ときめつけたこの女性を一人の人間として見ることはついにない。

Ⅲ. 女性主体と逸脱的「他者」

Ⅲ.1. ロランド夫人とエミリー・フェラーリ

ナローナ伯爵夫人を「悪」として排除する暴力は、女性の登場人物の主体成立においても起こる。ナローナの毒婦としてのイメージは、相対的に女性の中にある高潔、正直、貞潔といった女性的価値理想を呼び起こさずにはおかない。その典型的な例はロランド夫人、そしてエミリー・フェラーリであろう。ロランド夫人は物語のインターラードに当たる部分で、ほんの少々登場するだけの人物であるが、Montbary卿の夫人付きのメイドとしてイタリアに随行し、兄といわれているリバー男爵と夫人（ナローナ）の関係について疑惑を投げかける人物なのである。ロランド夫人のいうように、おそらく彼らは愛人関係にあるのだろう。だがもちろん真偽のほどは分らない。何しろ、ロランド夫人はイタリア人ガイドのフェラーリが「なれなれしくした」というだけで恐慌をきたし、彼を彼のことを「何をしてもおかしくない」非常識人と考えるような狭隘な道徳心しか持たない「堅物」であり、同時に自分の発言で「人が落胆するのを楽しむ」ような底意地の悪い女性なのである。ともあれ、この人物は女主人の「不道徳性」に反発して自ら退職を願い出る。この女性は「英国の立派な召使」に相応しくない存在としてナローナを告発することで自らの高潔さの証明とするのである。¹²

エミリー・フェラーリの場合は、もう少し複雑である。エミリーはモントバリ卿に従ってイタリアに赴き、現地で失踪したガイドの妻である。彼の失踪は、結局病死であるのだが、彼は、モントバリ殺害を企てるナローナ伯爵夫人とリバー男爵のたくらみの道具となることを1000ポンドで承諾し、瀕死の病態でモントバリと入れ替わって死ぬのである。この事情の一切はナローナの告白によって明らかになるのだが、結局告白文も葬られてしまったために最後まで証拠も何もないままに、彼女は夫の殺人を固く信じ続ける。

エミリーが夫の死亡について抱くこのゆるぎない確信は、よく考えてみると奇妙なのだ。普通なら生き残っている方の可能性を考えたくなるものであろうのに、フェラーリは死んだものと諦めたがっているような断定的結論を最初から下すのである。彼女の根拠は夫からきた二、三の便りに書かれた夫人に対する密通疑惑の断片とナローナ伯爵夫人の風評にすぎない。彼女のもとに届いた1000ポンドを彼女は夫の捜索のために使えたのに、彼女はその金を「夫が血で買った金」として決して使おうとしない。その一方で、ナローナ伯爵夫人に直接会ってフェラーリ殺害の証拠を握るべく「罠にかける」ことを画策したりするのである。

夫がナローナの不義密通を目撃してしまったために、彼らの手にかかったという彼女の事件推理は、ナローナに1000ポンドの小切手を突きつけて動揺した表情に殺害の証拠を見ようとする彼女の発想ともども法律のプロの失笑を買うメロドラマティックなものだが、彼女にとってはこの芝居がかった悲劇的「物語」は彼女のアイデンティティにはきわめて重要な意味があるのだ。というのは、そもそも彼女の夫のイタリア行きは、うまくいかなくなった結婚生活に体裁よく距離をおくために必要だった処置であった。夫に旅行ガイドの職を探してきたのはエミリーで、彼女は昔奉公していたアグネスに力添えを頼むことによってなんとかモントバリの供の職を確保したのである。こうした状況下での夫の失踪を殺人に結びつけるというのは、あるいは、結婚の破綻で傷ついたプライド、彼女をかまわなくなった夫に対する潜在的敵意、もしくは思いがけない結果を生んだ自分の行為に対する罪の意識を、殺人者の悪に押し付けて回避する巧妙な筋書きのようにも思えるのである。実際エミリーは殺害された夫を思い犯人を熱心に捜し求めるな貞潔な妻の役を喜んで演じているように見えるのもそう考えれば納得がゆく。またエミリーは、差出人不明の1000ポンドが手元に届くと、その文面から差出人はフェラーリを助けたくても助けられなかった雇い主モントバリが、忠実だった召使の残された妻に対する感謝と思いやりからこれを送ったと解釈するのだが、こうした美化と派手な粉飾のなかに、悲惨に終わった結婚生活に対する補償、そして自己憐憫をみることはたやすい。エミリーの自己意識はかように浅薄なものであり、結局フェラーリの心づくしの1000ポンドの意味も彼女には届かない。彼女は、女性における貞潔と忍従あるいは献身といったイデオロギーに突き動かされ、見るべき複雑な真実を単純化し、夫と自分の深みを犠牲にして、安易な自己を再構築してしまったのである。

Ⅲ.2. アグネスの主体再構成とダブルの構造

では、この物語の唯一の「善女」に見えるアグネスはどうであろうか。身勝手な婚約者に裏

切られてもこの清純貞潔な女性は相手を恨むよりは、許し、彼が死んだ後は、自分の「心は死んだモンタバリとともに葬られたのだからほかの男性、新しい恋など」考えられないと、節操深く生きようとする存在なのである。また彼女はこの作品の登場人物のなかで唯一ナローナ伯爵夫人を毒婦として見るのがなく、一人の女性として受け入れようとするのである。したがって彼女に関しては、真実はいかなる意味でも隠蔽されず、したがってその主体には何ら抑圧はないかのように思われるのである。そして結局ヘンリーと結ばれる結末においては、あたかも清純なヒロインがその真実のゆえに報われて誠実な恋人と結婚するという筋で読みたくなるのである。だが、彼女もまたこの物語の中心的問題と無縁ではない。

この物語におけるアグネスの問題は、モンタバリに対する節操と熱心に求愛を続けるヘンリーに対する愛情をどう折り合いをつけるかということである。拒否しつつも次第に関心を持ち始める自分に当惑する彼女は、物語の前半を通じてできるだけヘンリーから離れ、独立した行動を取ろうとするのである。ところが、後半部、アグネスは例のホテルで、切断された首の幽霊を見、モンタバリ殺害事件探索の乗り出したその時点から奇妙にも、ヘンリーに対して積極的な態度を取り始めることになる。さらに奇妙なのは、幽霊をモンタバリではないかと疑い、「キリスト教的埋葬を求め、犯罪に報いるべき復讐を求めて私の前にあらわれた」と考え、合理主義者のステイヴンを困らせるほど、搜索を主張するにもかかわらず、いよいよ真相が明らかになるに及んで、彼女は、突如搜索を中断することであろう。あたかもヘンリーという保護的男性を手にいれた途端、モンタバリ事件に関しては、疑問も矛盾も感じられなくなったかのように。

アグネスのこうした謎めく主体再構築過程を考察する前に考えておかねばならないことが二点ほどある。一つは、アグネスは、ナローナといわばダブルの関係にあるということである。それは、何も彼女らが時代の女性幻想の二面を表しているという意味ではない。両者はその内面のありようにおいて、心理的に互いの抑圧部分を相手に投影しあうような関係となっているのである。そもそも登場人物の多くの人々に「聖女のような」アグネスとして見なされる理由は、彼女が世の女性理想を体現する人物であるからだが、それは彼女がフラットな人物像であるからではなく、彼女は従順や清純、貞潔や無垢といったジェンダー化された道徳的価値を内面化しており、その他の価値たとえば、猜疑や不信、憤怒や恨みといった感情を抑圧するタイプとして造形されていることによる。一方、ナローナはその逆だ。そもそも彼女の贅沢を好み、賭博を愛し、結婚制度を軽んじるのは、大陸的貴族的価値観の反映であるが、そうしたイギリスのジェンダー化された価値観とは相反するものの他に、彼女は金銭的に追い詰められ犯罪に手を染めるとともに、そのことを逆に捉え返す視点を持ち合わせているのである。いわゆる彼女の言うところの「イギリスの想像力」である。このことを別に「良心」といってもよいし、あるいは無垢と清純を価値とするジェンダー化された道徳的イデオロギーの影響といってもよい。つまり、彼女らは一見正反対に見えながら、その内面は重層的に造形されており、そうした内面において、図式的に言えば、いわば、相対的反転関係にあるのだ。そのことは、ナローナが妄想かもしれないと思いつつワイブラウ医師に相談した内容——アグネスの「落ち着

いた青い瞳」に自己が照らし出されているように感じた感覚——が如実に暗示している。

「わたしはその瞳の奥に彼女の魂を感じました。それはわたしの魂を——そんなことができるのでしたら、意識することなしに覗き込んでいました。．．．彼女の眼が意識もせず覗き込んでいたのはわたしの奥に潜んでいた悪の資質でした。」¹³

アグネスの場合、ナローナに対してこのように研ぎ澄まされた相互反転的対照感覚は見られない。しかし自分の内面を振り返る場面で、初めて己の内に潜む悪感情に直面したとき、それにナローナを連想させるイメージを結び付けていることは注目すべきであろう。それは、ベニス滞在第一日目の夜、彼女の心に初めて自分に対するモントバリーの「ひどい仕打ちが痛切に意識され」、彼に対して「優しく寛大な彼女が覚えたことないような」怒りを「ヘンリー・ウェストウィックと同じくらいに」感じるようになった場面である。そうした慣れない感情を彼女は、「その眼下に広がる漆黒の闇」のなかで感じるのである。またアグネスはいままで意識していなかった自分の感情に「恐れと疑念」から「震え上がって」、それは「神秘的で暗い水面のせい」といわんばかりに灯りを付けようとするのである。¹⁴「漆黒の闇」それはナローナ夫人の服装そして、特徴的な目の色なのである。この日ヘンリーに対する思慕がそれとわかる形でアグネス自身に認識されたことと、彼女の悪感情を意識したことは無縁ではない。これはこのちアグネスがヘンリーを受け入れることの心理的準備となっているように思われる。¹⁵

さてこのように心理的な屈折があることを考慮に入れて、この晩続いて起こったアグネスが体験した怪奇現象を考えてみると、この体験は、じつはアグネスにとっては「夢」としての意味をもつのではないかということが考えられる。心に起こってきている危機的状況を告知し、なおかつそれを受け入れる素地を想像的に体験させる精神の働きである。¹⁶ ストーリとしては、首が発見され、それを裏付ける告白が示されることで、読者には、一見犯罪の謎の解明に関わる超自然的体験に過ぎない出来事と思われてしまいがちだが、今一度考えてみると、アグネスは決してナローナの告白を最後まで知ることがない。とすれば彼女にとっての意味はまた別に考えても良いことになる。それに、上に指摘したように彼女のこの後の行動を見てみると、この夢の後、なにかが吹切れたようにヘンリーの腕を自ら取るなど、積極的に接近し、あまつさえ彼に対して依存的態度を示しだすのである。アグネスの主体再構築過程を考えると、きにもう一つ必要な事柄は、まさにこの「夢」の持つ象徴的意味を考えることであろう。

「夢」の次第は比較的単純である。アグネスは、いつのまにか彼女の寝室に侵入しているナローナ夫人に驚かされている。彼女は揺り動かしても起きない。人を呼ぼうとして彼女はベルの方に手を伸ばすと、天井近くの空間にもう一人の侵入者がいるのに気づく。それは首だけの男で腐敗し外見も崩れ誰とも分らない死体の一部である。それは次第に降下してくるとナローナの前に止まり、やがてゆっくりと眼を開いて伯爵夫人を恐ろしい視線で見つめる。そのとき、ナローナもまた亡霊と同じようにゆっくりと眼を開くのである。彼女は起き上がる。そして彼女の夢は中断する——。では解釈はどうか。まず、モントバリの原型を留めぬほど腐敗した首とその開眼は、おそらく彼女のモントバリ自身に対する幻滅と憤りの開眼の象徴であろう。そしていつのまにか彼女の部屋に進入して起こしても目覚めないナローナとは、彼女の怒り、あ

るいは既存の規範を越えて第二の恋人を求めようとする生命力を意味しよう。そしてそれは、モントバリの嫌悪すべき正体が明らかになった機会について目覚め、起き上がる——。このように読めば、彼女がいかにこの体験によってモントバリーへの固執とヘンリーへの思慕という心理的桎梏を解いたのか理解できよう。

だが、心理的な意味では決着がついたアグネスの前にはまだ大きな問題があった。ヘンリーとともに、ナローナの示す遺体の隠し場所のからくりの搜索を始めたものの、それを続行することは、彼女にとっては、それは彼女の主体構築を阻むことになるということだ。つまり婚約者が苦しみに満ちた非業の死を遂げたことが明らかになっては、従順で無邪気な女性としてヘンリーの腕にすがることができないからである。そこで、彼女は唐突に真実探求中止を申し出る。いよいよ事件の真相を明らかにする決定的な証拠を求めて再度ナローナに迫ろうとするヘンリーに対してアグネスは叫ぶ。

「できないわ！ムリよ！あの部屋であんな恐ろしいことが起きた後ですもの、伯爵夫人が一層気味悪く見えてきたの、あの人に会ってくれなんていわないで、ヘンリー。私の手を取ってちょうだい。あなたがそんなことを言うから、私の体は死人のように冷たくなってしまったわ。」¹⁷

この中断の意味するところは大きい。なぜなら、首がモントバリのものである可能性があることを疑いながら、この時点で真相究明を打ち切ることは、モントバリの遺体放置を平気でおこなうことを意味するからだ。つまり、彼女もまた、スティーヴンやヘンリーと同じことを行ったのだ。微妙なモントバリの第二の殺人、すなわち記憶からの抹殺である。「悪しき」存在としてモントバリーをかように葬ることで、過去と良心を抑圧し、かくて彼女はヘンリーの妻、無邪気で依存的な女性という主体意識を無事確保するのである。

IV. ナローナ伯爵夫人：主体感覚の分裂と闘争

登場人物の主体が、真実を糊塗し他者を抑圧する微妙な暴力的な力のもとに生じることを見る小説としてみた場合、本物の殺人を犯しそれを隠蔽するナローナ伯爵夫人のアクチュアルな悪はいかに後退して見えてしまうことになる。何しろナローナは金銭目当ての結婚をした挙句、財産が少ないと見て取るや、生命保険を掛けて夫を殺害し、その金を賭博に溺れるリバー男爵に金を貢いだと考えられる非道な人物なのだ。加えて、自らも賭博に興じる一方、蓄財、儉約を軽蔑し、最高級の宿、ドレスを欲し、後先の考えなく財を蕩尽する刹那的存在である。こうした反社会的行為を無反省に続ける人物が、殊のほか建設的理性的時代に人々にとって危険人物と見なされたことは疑いを入れない。だが、この小説は、このようにいかにも時代の制度、コードから逸脱した存在が、人々の浅薄な自己正当化の便利な道具にされる微妙な暴力を暴露することを目的としている小説なのである。前景化されるものは、彼女の社会的危険性ではない。だが、だからといって、この小説は必ずしもそうした逸脱的人物に同情的であるかという点必ずしもそうとはいえない。ナローナもまた、小説における中心の問題である主体構築に潜む暴力から免れてはおらず、この小説の中心の問題の一角をなすのである。社会から逸脱

者としてラベリングされるナローナの場合、主体再構築の問題は、他の登場人物に比して厳しいものとなる。というのは、彼女は彼女を裁く社会のジェンダー・イデオロギーに対して主体を再構築せねばならないのだが、ナローナはすでにそのイデオロギーを内面化した存在であり、かくてその分裂のゆえに二重の意味でそれは、彼女を追い詰めるからである。

ナローナがたとえば、ヘンリーに対して嘲笑的に振舞うように、いわゆる「毒婦」としての社会の評価を意に介さない強さを持った女性であることは少し注意してよいであろう。それは、単なる犯罪者の強がりというよりは、彼女の他者理解能力、即ち己の存在が他者にどう映っているのか理解し、現実とのギャップを知っている自覚的能力からくるのである。それは、言葉を替えて言えば、彼女の言うところの「イギリス的想像力」にある意味では繋がるものである。つまり、己の存在を捉え返す、そうした内面の複雑さの自覚があるからこそ、他者の単純性を嘲笑できるのである。また、ナローナは単に自己中心的な欲望に突き動かされた犯罪者でない一面を持つ。彼女の告白によれば、彼女が生命保険殺人にいたる金銭目当ての結婚をした動機とは、そもそもリバー男爵への献身のためであったのである。それなりの美化があることを差し引いても、彼女の主体意識の中に、男性に対する自己犠牲、献身を「善」とするというジェンダー・イデオロギーが強く影響していることは否めない。そのことは、実に、彼女が死に至る直前、意識混濁の果てに、罪の意識を失ってもリバー男爵に貢ぐ金を稼ぐために創作の筆をとめようとしないうちからも十分察せられるのである。だがそうした彼女の内面の深みは、彼女を救いはしない。

「南国人には珍しい」「想像的特質」が、リバーとともに金銭を目的として犯罪的選択を重ねて生きてきた彼女自身の生を捉え返す良心、ないし道徳的価値観であることは先に見たとおりである。彼女はアグネスに対面し、その自己の悪の存在を実感したというが、逆にいえば、それは、彼女の内なる善のイメージにほかならないはずだ。だが、彼女の場合、それは、彼女自身を否定し処罰するものとしてしか意識されない。それは強烈な否定意識で彼女の人生を単に惨めな人生として見せるというよりはさらに過酷な「長い恐怖の連続」として感じさせるのである。この脅威的なヴィジョンは、「あるときは私にとって現実に見えるものが結局は歪んだ精神の生み出す幻に過ぎないのではないか」と彼女自身述べているように必ずしも一貫して意識されるわけではない。¹⁸ だが、彼女は自己を暴力的に否定するこの意識——回避すべきであるのに引かれてしまう自滅的主体感覚に促われてゆくのである。アグネスという表象によって相対的に自分自身を「悪」と位置付けるとすれば、彼女は外部から彼女を排除しようとするイデオロギーに反発しながら、実は己に内面化された同じイデオロギーによってすでに自分を一面的に裁いていることになる。彼女がこの物語のなかで過剰な存在である理由は、裁くイデオロギーに逆らいつつ、内においてすでに敗れているというところにあるのだが、ここに彼女の主体感覚の「病」とその問題がある。そして外部もまた内部にも救済を見つけることのできない人の「残酷で悲しげな微笑」の理由がある。

彼女がこの分裂を往還し、あるいは外部から押し付けられる主体像に対して反発してみせる生命力を持つ存在であるという事は、彼女が告白をする際に芝居の脚本という二重の形式を取

る意味を明らかにしよう。それは、彼女の主体のありように関して相応しい方法なのだ。彼女にとっては過去を一つの観点から提供することはできないのだ。彼女は犯罪を「告白」できない。もっとも逃亡することもできない。創作と告白という二重視角は、満足できるとはいわないまでも、すくなくともその主体感覚の分裂をそのままに可能ならしめる視点なのである。とすればある意味でそれは、主体に重ね書かれるさまざまな暴力的解釈に対するそれは精一杯の主体の抵抗ということもできよう。

だが、主体に及ぶ暴力——外的にも、内的にも重ねがかれる行為に潜む暴力的な力に対する戦いをこうした形で進めたとしても所詮負け戦であることに変わりはないことは、先ほど見たとおりである。そのことを決定的にするのがナローナの告白の中断であろう。アグネスがベニスの問題のホテルに投宿した晩、ナローナは、「彼女の眼を通して」何が起こるか見ようとしてアグネスの部屋に潜入している。おそらくはアグネスにとってそれが象徴的体験となったと同じく、彼女もこの霊の到来を象徴的なものとして体験するのである。彼女はその後「あの世が存在するなんて思わなかった」としか述べていないが、この一言は重要であろう。というのは、その体験以降、彼女の意識から「告白」は告白でなくなるからである。モンパリの霊が彼女に示した意味は、自ら罪について最後通牒を渡したということであろう。彼女の罪はこの世を越えるレベルで決定したのである。もはや告白する意味は消滅し、絶望した彼女は自分自身を捉え返す意識を文字通り失う¹³。そこに残ったものは、もはや過去の習慣的行為、思考としての自我しかない。即ち、今は亡きリバーに貢ぐ目的をもった創作行為をおこなう自分である。彼女の最終的な挫折は、暗示されているとおり、もっと物理的解釈をすればよいのかもしれない。すなわち絶望のショックで脳溢血の症状が一挙に進行し、脳が圧迫され、最近の記憶が失われたのだ、と。だが、それはそれだけ、人間の主体意識の脆さを露呈するに過ぎない。それにしても、ナローナ夫人が最後まで「創作」の意志を放棄せず、あまつさえ新たな第一章を書き始めようとした痕跡があることは、彼女をつき動かすジェンダー制度の力を感じさせてすさまじい。だが、それはもはや内なる葛藤に消耗した挙句、自己犠牲幻想だけに収縮してしまった主体意識の抜け殻でしかない。従ってそこには何も内容の書かれない第一章が残ることになる。ナローナはジェンダー・イデオロギーによって幾重にも切り裂かれた存在といえよう。

V. センセーション再定義

以上見てくると、この小説はいかにも犯罪の謎をめぐるセンセーション・ノヴェルと見えながら、そこに提供されているセンセーションは、実は単なる殺人事件にまつわる、動機や殺害方法の謎とその究明がもたらすスリルやサスペンス以上のものであることがわかる。それはまた狂気や妄想、あるいは怪奇に関する恐怖以上のものである。その種の小説的条件として、基本的に持っていなければならない要素は一応そろえた上で、この小説が掘り起こし、掻き立てることをねらうセンセーションは、自己という分りきったはずの内面の、実は不安定で従属的なありようについての不安なのである。登場人物それぞれの主体の危ういその成り立ちの物語を通して、リベラルで自立的な主体の保証を望んでいた読者はその期待を覆される。この小説

のタイトルであり舞台ともなった幽霊ホテルは、まさに合理的で近代化を遂げたそうした自己の象徴だ。近代的設備と文化的絢爛を蓄積した資本主義的快樂空間は、快適でスマートな表面を内と外に向けている。だが、そのどこかには隠し部屋が存在し、あるいはそこには、腐臭紛々たる死体の一部が隠されているかもしれないのである。時代が定めた好ましい主体を構築しようとする人々の内面とそこに働く力を見据えて、コリンズは、主体意識をめぐるラディカルな不安を提供するセンセーション・ノヴェルを書いたのである。

註

- ¹ Jenny Bourne Taylor, *In the Secret Theatre of Home: Wilkie Collins, Sensation Narrative, and Nineteenth-Century Psychology* (London: Routledge, 1988, 2). Also see Nadir (283).
- ² T. S. Eliot (467).
- ³ Gasson (142).
- ⁴ なぜなら、こうしたどんでん返しは、たとえば、この作品が発表されたと同じ *Belgravia* 誌上で、Mary E. Braddon (1835-1915) がその出世作となった *Lady Audley's Secret* (1861-2) においてすでに試み済みのものでありこの作品が同年に完結してから年内に8版を数える人気ぶりであったことから考えて、センセーション・ノヴェルというジャンルの草分けとしてブラドンの先達であったコリンズが、15年後、ただ同じ仕掛けを目的に小説を書くことなどはありえない。実際コリンズはそのあらゆる作品においてあらたな小説の技法を考案する革新的作家であったが、そうであればなおのことである。溝口 (36-7)。
- ⁵ Is that all?
That is all.
Is there no explanation of the mystery of The Haunted Hotel?
Ask yourself if there is any explanation of the mystery of your own life and death.
—Farewell.
The Haunted Hotel (Dover, 1982) p127. 以降、本文引用は甲斐清隆・板倉巖一郎訳(臨川書房、2000年)により、長文のみ Dover 版の頁数、章を示す。訳文はところによって若干の変更を加えた。
- ⁶ そのことはもちろん犯罪の隠蔽が結末にある物語を含む。犯罪の謎が完全に解明されたあと、隠蔽されることと、この物語のように解明されないままに隠蔽されることは違うのである。その意味で、コリンズはブラドンの仕掛けをさらに工夫しているといえる。
- ⁷ ダイクストラ (1994)、第7、8章。
- ⁸ 19世紀的枠組みでいうならば良心の欺瞞をドラマとして描く小説ということができるであろう。良心の欺瞞の影にある力こそ、彼らの内面にある価値観-法制度を超えた内的規律もしくはイデオロギーということができる。以下の引用はそれを示す。
The most easily deteriorated of all the moral qualities is the quality called 'conscience.'
In one state of a man's mind, his conscience is the severest judge that can pass sentence on him. In another state, he and his conscience are on the best possible terms with each other in the comfortable capacity of accomplices.
(あらゆる人間の徳性のうち、もっとも墮落しやすいのは「良心」と呼ばれるものである。気分によっては、良心は人に刑を下すもっとも厳格な裁判官となる。しかしまた気分によっては、人はその良心をうまく丸め込んで円満な共犯関係を結んでしまう。)
The Haunted Hotel (Dover, 1982) pp.10-11. 第2章。
- ⁹ Apart from his first emotion of surprise, the feeling she produced in the Doctor may be described as an overpowering feeling of professional curiosity. The case might prove to be something entirely new in his professional experience. 'It looks like it,' he thought; 'and it's worth waiting for.' *HH*, 4. 第1章。
- ¹⁰ 卑しい肉欲、禍禍しい下等さ、原始に近い女性性への嫌悪である。男性に危険な欲望を喚起させる存

在として、あるいは危険そのものを孕む存在としての悪魔的な女性の前に、やみがたい好奇心を覚えるとともに結局は後悔をしかもたらないそんな他者を見ているのである。注7参照。

¹¹ He tried vainly to think of her as a person to be pitied—a person with a morbidly sensitive imagination, conscious of the capacities of evil which lie dormant in us all, and striving earnestly to open her heart to the counter-influence of her own better nature: the effort was beyond him. A perverse instinct in him said, as if in words, Beware how you believe in her! (*HH*, p.9., chap.3)

¹² *HH*, chap. 13.

¹³ ...the calm blue eyes...were only looking at me....I felt her soul in them, looking into mine—looking, if such a thing can be, unconsciously to her own mortal self. Her innocent eyes saw hidden capabilities of wickedness in me.... (*HH*, p.8)

¹⁴ *HH*, chap. 22.

¹⁵ 内面変化を時間にそって辿って見た場合も、アグネスとナローナは互いのその抑圧された内面の象徴として現われているように見える。つまり、互いにとって相手の出現は、内面に亀裂が入り、それまでの自分には明確に意識されていなかった感情が浮上ないし顕現化することと一致している。また、相互の関わりとの継続と再会は、互いの疑いや未知の感情の持続や先鋭化と一致しているほか、後に見るように、両者の内面における葛藤の消滅はその内面の平板化と呼応していると考えられるのである。アグネスはヘンリーに対する欲望を明確に意識した時点で、ナローナは亡くなる。一方自己を韜晦しつつ告白をしようとする劇作を開始した後、ナローナが「アグネスの眼を通して」超自然的な存在を目の当たりにしてから、ナローナの意識から告白という意図が消滅するのである。つまり、アグネスにとってナローナはその反道徳的感情の投影なのだが、後に見るように同化されてしまうと、もはやその意味はない。またアグネスはナローナにとってその「良心」なのであるのだが、罪が定まって絶望してしまうと「良心」は機能しなくなる。

¹⁶ 同じ意味でウェストウイック家のスティーヴンを除く多くの人々に訪れたモントバリーの幽霊も、彼らの内面の不均衡ないし危機的状況を告知する彼等自身の内面から警告としての読みができるものであるかもしれない。

¹⁷ 'I can't! I daren't!' she exclaimed. 'After what has happened in that horrible room, she is more repellent to me than ever. Don't ask me to do it. Henry! Feel my hand—you have turned me so cold as death only with talking of it!' (*HH*, 109).

この最後の行はあたかもアグネスがナローナを同化したことを思わせて興味深い。

¹⁸ At one time, I had the hope that what seemed reality to me was only mad delusion, after all... (*HH*, 82. chap. 19)

参考文献

- Ashley, Robert. *Wilkie Collins*. New York : Haskel House, 1976.
- Braddon, Mary. E. *Lady Audley's Secret*. Oxford : Oxford U. P., 1991.
- Collins, Wilkie. Introduction by Norman Page and Toru Sasaki. *Mister or Mrs? The Haunted Hotel, The Guilty River*. Oxford : Oxford U. P.1999.
- Collins, Wilkie. *The Haunted Hotel : A Mystery of Modern Venice*. New York : Dover, 1982.
- Eliot, T. S. "Wilkie Collins and Dickens" *Selected Essays*, London : Faber and Farber, 1932.
- Fraser, Flora. *The Unruly Queen : the Life of Queen Caroline*. Berkeley : University of California Press, 1997.
- Gasson, Andrew. *Wilkie Collins : An Illustrated Guide*. Oxford : OUP, 1998.
- Heller, Tamar. *Dead Secrets ; Wilkie Collins and The Female Gothic*. New Haven : Yale U. P., 1992.
- Miller, D. A. *The Novel and The Police*. Berkeley : University of California Press, 1988.
- Nayder, Lillian. "Wilkie Collins Studies : 1983-1999." *Dickens Studies Annual*, Vol. 28. AMS, 1998.
- Page, Norman. Ed. *Wilkie Collins*. The Critical Heritage Series. London and New York : Routledge, 1996.
- Pykett, Lyn. Ed. *Wilkie Collins*. New Casebooks. Houndmills : St. Martin's Press, 1998.
- Richetti, John. Ed. "Wilkie Collins and the Sensation Novel." *The Columbia History of the British Novel*. New York : Columbia U. P., 1994.

ブラム・ダイクストラ『倒錯の偶像——世紀末幻想としての女性像』富士川義之ら訳、パピルス、1994年
ウィルキー・コリンズ『ウィルキー・コリンズ傑作選』第2巻、甲斐清隆、板倉巖一郎訳、臨川書店、
2000年
溝口 薫「19世紀後半イギリスの探偵物語——アマチュア紳士探偵と正義の絶対化」『探偵小説と多元文
化社会』別府恵子編、英宝社、1999年

(原稿受理 2001年5月2日)